



Title	児童養護施設で生活する子どもたちと支援ーリアリティ定義の交錯と排除ー
Author(s)	宇田, 智佳
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/101608
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (宇田 智佳)	
論文題名	児童養護施設で生活する子どもたちと支援—リアリティ定義の交錯と排除—
論文内容の要旨 本研究では、児童養護施設の子どもたちの生活経験と支援の交錯を描いていくことを目的としている。その上で、子どものためになされる支援に対する示唆を提示する。 本研究の第1章で先行研究を検討した結果、児童養護施設施設入所中の生活の場に沿って研究が蓄積され、それぞれの場において施設入所児たちが直面する課題や、その背後にさまざまな社会構造的要因があること、課題に対する支援について議論がなされてきたことを整理した。しかし、これまでの研究では、子どもたちの経験と支援が分けられて論じられてきたことが課題として浮かびかがってきた。そのため、子どもたちの経験と支援の交錯を明らかにした上で、支援によって生じる子どもの問題経験を検討することを分析課題として設定した。 第2章では、調査の概要として、調査対象地や調査方法などを述べた。 第3章では、児童養護施設でのフィールドワークから、トラブル構築過程を描き出すことを通して、子どもたちのトラブルの記述と施設職員の対処実践とその論理を明らかにした。児童養護施設では、子どもたちは施設職員に対し、言い分や〈被害〉の状況をそれぞれの立場から述べ、施設職員はトラブル当事者たちの説明をもとに状況の定義を行い、「逸脱」した子どもを特定するとともに、トラブルの原因を考えさせていた。そして、トラブル当事者たちや周囲の子どもによって協働的にトラブルの記述がなされ、その説明を施設職員が聞き取っていた。そうすることで、トラブルを「コンフリクト」の問題であるのか、「逸脱」の問題であるのかを即座に定義しつつ、施設職員は仲裁を行っていた。しかし、施設職員はさまざまな業務を行いながら子どもへの対応も行うという制約がある。そのため、「予防的対応」が積極的になされていた。そこでは、「怖い言葉」の使用をもとに、状況の定義が曖昧なままでも積極的に施設入所児同士のやりとりに施設職員は介入し、トラブルの予防が試みられていた。 こうしたトラブル対処の手続きやその論理は、施設入所児たちの生育環境を踏まえた施設職員によるトラブルの説明、「大人」—「子ども」という非対称な関係性による解決的行動の実践、児童養護施設における職員配置という構造的制約・条件を背景に成立していた。しかし、施設職員の状況の定義が優先されることで、トラブルをめぐる子どもの訴えが後景化することを示した。 第4章では、児童養護施設と小学校とでのフィールドワークから、学校生活をめぐって形成される仲間集団の相互作用の様相と仲間集団に対する実践とその論理を検討してきた。学校では、施設入所児たちが形成する仲間集団の内実として、配慮や気遣い、一緒に過ごすといった「弱いケア」の様相が示された。こうした「弱いケア」は、児童養護施設の相互作用の蓄積を通して組織化されていたと考えられる。そして、「弱いケア」により、状況に応じて知識や振る舞いを選択的に活用し、不利な立場になりうる施設入所児の学校生活をサポートし、適応するための方向づけがなされていた。 その一方で、こうした仲間集団は、施設職員には、関係性の内閉化による友人関係の閉鎖性、非対称性、教師には教室内の秩序維持という点で問題化されていたことを明らかにした。このような論理から、施設入所児たちの仲間集団によるケアを理解しつつも、教師たちはときに「一般家庭」の子どもたちを介しながら、仲間集団を切り離す実践を行っていた。こうした実践に対して、施設入所児たちは、仲間集団を維持しながら「一般家庭」の子どもたちと相互作用を蓄積していく。しかし、「一般家庭」の子どもたちは、施設入所児たちに対して差異を共有することができず、施設入所児たちは非難されやすい状況が生じていた。 第5章では、施設入所児たちへのインタビューによって得られた語りから、子どもたちがどのように家族経験を意味づけ、家族の再構築を実践しているのかを明らかにしてきた。まず、彼女たちは施設入所前の家族について、「非標準的な」家庭生活の側面を強調して語っていた。そして、「非標準的な」	

家族に該当するエピソードを語ることによって、施設入所の理由を正当化していた。施設入所後の家族をめぐる語りからは、彼女たちは家庭と離れ、施設生活を始めるなかで、家族交流においては、家族の状況が優先されやすいという構造的な制限を経験していたことが示された。そして、こうした経験は、家族であることをめぐって彼女たちにジレンマを生じさせることがあった。

しかし、構造的な制限がありながらも、彼女たちは家族との関係の維持・調整を実践することによって家族の関係の悪化を回避し、現在の家族をなんとか成立させていた。さらに、彼女たちは家庭復帰を希望していることから、彼女たちの家族をめぐる語りは、「標準的な」家族の語りへと一元化していくことを示した。

第6章では、施設入所児たちへのインタビューから、高校選択のプロセスを明らかにした。施設入所児たちは、進路支援に関して、施設職員との通塾をめぐる交渉や将来展望に向けた学校での進路指導などの複層的な支援を語っていた。その一方で、家族との交流が継続するなかであって、進路について報告に留める場合や、「養護問題」の継続により、進路選択の再構成に迫られるケースもみられた。こうした進路選択の再構成にあたって、施設入所児たちは、進路の変更についての責任が家族に帰属されることを回避させ、家族を肯定的に捉えようとしていた。そして、どのような進路選択においても、こうした進路選択のなかでの経験を通して、児童養護施設退所後の自立への不安を同時に語っていることが示された。

以上を踏まえ、終章では、知見の整理を行った上で、施設入所児たちの生活経験をめぐって、リアリティ定義の交錯と排除が生じる背景を分析した。最後に、全体の知見から、第一に、施設入所児たちの複数の生活圏を捉えること、そうしたなかで支援が施設入所児たちの経験に即して実践されていることを示した。こうした知見から、問題経験と支援を動的に捉える視座を提示した。第二に、子どもの経験が大人による支援によって変化しうることを示し、問題経験のメカニズムに対して新たな視点を提示した。

第三に、「子どものため」になされる支援に対して、子ども意見を聞く上で見落とされている視点や、子どもの声を聞くことの難しさに焦点を当て、実践的・政策的示唆を提示した。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (宇 田 智 佳)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	高田 一宏
	副 査	教授	木村 涼子
	副 査	准教授	知念 渉
	副 査	学外委員	志水 宏吉
		(武庫川女子大学教育総合研究所/教授)	

論文審査の結果の要旨

本論文の目的は、児童養護施設で生活する子どもたちの生活経験と大人からの支援との交錯に注目し、施設の子どもたちに対する支援にかかわる理論的・実践的課題を明らかにすることにある。論文の中核をなす第3章から第6章の内容は次のとおりである。

第3章「児童養護施設におけるトラブルからみる支援と排除」では、トラブルがおきたときの対処やトラブルがおきないようにする予防的対応の手続きとその論理が成立する条件・背景を検討している。そして、職員のリアリティ定義が子どものそれよりも優先されることで、トラブルをめぐる子どもの訴えが後景化していることを明らかにしている。

第4章「小学校における仲間集団をめぐるジレンマ」では、施設の子どもたちの仲間集団が、配慮や気遣い、一緒に過ごすといった「弱いケア」の基盤になっていることを明らかにしている。そのような仲間集団は子どもたちの学校生活をサポートする一方、施設職員には友人関係の閉鎖性と仲間関係の非対称性という点から、教師には教室内の秩序維持という点から問題視もされている。

第5章「子どもたちが語る家族」では、子どもたちがどのように家族経験を意味づけ、家族の再構築を実践しているのかを検討している。そして、子どもたちが家族関係の悪化を回避し、現在の家族をなんとか成立させようとしていること、もとの家族への復帰を希望するなかで、家族をめぐる語りが「標準的な」家族の語りへと一元化していることを明らかにしている。

第6章「子どもたちの進路選択をめぐる不安と支援」では、中学生へのインタビューによって高校選択のプロセスを検討している。子どもたちは、施設職員との通塾をめぐる交渉や学校での進路指導などの支援を語る一方、家族(保護者)には進路について報告に留める場合や、進路選択の再考を迫られる場合があること、そうした場合、子どもたちは施設退所後の自立にかかわる不安を抱えていることを明らかにしている。

以上のように、本論文は、児童養護施設とそこに暮らす子どもたちが通う小学校で長期にわたる参与観察とインタビュー調査を行い、施設の子どもたちの生活と教育を包括的にえがきだすとともに、中学卒業後の進路選択が子どもたちの家族観や家族との関係の再構築と深くかかわっていることを明らかにしている。先行研究が「児童養護施設・学校・家庭というそれぞれの生活の場での固有の支援や課題が検討される」にとどまるきらいがあったのに対して、「生活の場の重なりとその意味」(論文22頁)を大人と子どもの視点を交えて明らかにしたところに本論文のオリジナリティがある。また、本論文は、子どもと大人のリアリティ定義に着目することで、支援の動態と支援に接する子どもたちの葛藤を明らかにしている。これらの知見は「子どものため」として行われる支援を批判的にとらえなおす上で大いに示唆に富む。

本論文は複数の学問分野(教育社会学、家族社会学、子ども・家庭福祉学など)の研究を結びつけ、子どもたちの意見表明権を尊重することの大切さと難しさを詳細にえがきだした労作として高く評価できる。これらのことから、本論文は博士(人間科学)を授与するのにふさわしい内容を備えていると判断した。